

今日は聖書預言という事でお話したいと思います。

今年5月1日から元号が変わって、約30年間平成だったのが令和になりましたね。

英語では Beautiful Harmony で、令和の令は“綺麗”、和は“ハーモニー”。中々しゃれた和訳だと思います。

5月1日以前、あるIT企業が、持っている人工知能で、平成の次の元号の予測にチャレンジしました。もし的中したら「この人工知能、スゴイ!」という事で、一気に会社のネームバリューが上がります。その結果、人工知能が割り出したのは「日安」(にちあん)。こんなの、ないやろと。一文字も当たらず。思いつき外してる。人工知能と言っても何でもやってくれる訳ではなく、アルゴリズムという、いわゆる問題解決の手順を入れるのは人間の仕事です。

元号は漢字2文字と決まっています、読み易く書き易い事となると常用漢字から選ばれる。尚且つ、今まで日本で使われた247の元号は全部除外。中国の元号も全部除外。更にはMTSH(明治・大正・昭和・平成のアルファベットの頭文字)も除外。そして、今までの元号採択選者の癖を分析して条件を突き詰めると、答えは絞り込まれて来る。それで出したら日安。なんじゃそれ?みたいな。

外した時、アルゴリズムを作ったこの会社の人が出したのは「思ってもみない事が起きました。」

何かというと、今回の出典は万葉集。今までの247の元号は全部、儒学・四書五経・論語・史記などの中国の古典から出ています。しかし安倍政権は、長い日本の歴史の中で、初めて国書から取りました。国書と言っても、日本書紀や古事記ではなく万葉集。歌集から。

「それで予測できなかった」と言い訳していたけど、これ見たら分かるように、人工知能は万能ではない。今までのデータの中で一番近いものは何かを探し出すのは得意です。だから、将棋・チェス・囲碁など世界最高クラスのチャンピオンが人工知能に勝てない。

もし未来が・過去に起こった事が、ぐるぐる輪廻のように必ず同じ事が起こるのなら、人工知能は未来予測に役立つと思います。しかし、未来とは何かというと、70億の人間がそれぞれ好き勝手する自由意思の結晶でしょ。何しかずか分からん・ある国が何考えてるか分からん・何をやり出すかも分からない。

その中で、人工知能に未来を予測させるのは不可能なんです。なぜなら、アルゴリズムを考える人間が、未来について何も知らないから。過去の事は知っている。でも未来の事は分からないので不完全なアルゴリズム。それに基づいて出て来た答えは不完全な答えです。

今日紹介したいのは、人工知能でも予測できない未来の事を、何千年も先の事まで非常に詳しく語っている書物バイブル。聖書は、これから世界がどうなっていくのか、人類文明がどんな流れで来ているのかを、それが実現する何千年も前から預言していました。来年の天気予報じゃないですよ。

100年先・500年先・1000年先・2000年先・3500年先・遙かかなたの事まで預言している。

人類歴史は、聖書が語る通りをなぞるようにして今まで動いて来たのです。

聖書預言によると、世界はこれから非常に困難な時代に入っていきます。

その困難な時代は7年間続き、7年間の前半の3年半だけで、世界人口が半分になります。

後半の3年半はもっと厳しくて、前半以上に悲惨で、苦しい暗闇の時代です。

なので、これを「患難時代」と呼びます。この恐るべき患難時代に向かって、世界は確実に動いている。

聖書は、患難時代が始まる前に、前兆としていくつかの大きな事件が世界に起こると預言しています。その絶対に起こらなければならないしるしの1つは、ユダヤ人国家イスラエルが再建されるという事。

ユダヤ人は今から約 2000 年前の AD70 年、イスラエルに住んでいたのですが、時の世界帝国ローマによって滅ぼされました。人口の 9/10 が虐殺されたんです。生き残った 1/10 は奴隷になって、アフリカ・アジア・ヨーロッパに散らされ、それからずっと流浪の生涯を辿って来ました。

国を失った後のユダヤ人の苦難・世界の状況・最終的に国が元あった同じ場所に建てられる、という事を前もって預言している箇所があるので、今日はそこから一緒に考えたいと思います。

### エゼキエル 37:1-14

**エゼキエル**は預言者の名前。エゼキエルの**エル**は「神」の意味。**エゼキエル**は「神が強めて下さる」という意味の名前です。この預言者がこの預言書を書いて 700 年後・2400 年後・2500 年後に起こる事がここに書いてあります。日本で一番古い書物は『古事記』と『日本書紀』で 1350 年前ですが、**エゼキエル書**は約 2 倍古い、今から 2600 年前に書かれました。

**1 主の御手が私の上にあった。私は主の霊によって連れ出され、平地の真ん中に置かれた。**

**そこには骨が満ちていた。**

これは幻です。エゼキエルが神によって幻を見せられます。ある**平地の真ん中**に連れ出されると、見渡す限り人骨の山。前後左右、どこまで行っても、ただ果てしなく、枯れ果てた人骨が山のように積み上がっている。

**2 主は私にその周囲をくまなく行き巡らせた。見よ、その平地には非常に多くの骨があった。**

**しかも見よ、それらはすっかり干からびていた。**

すっかり干からびていたと書いてあるので、生乾きではなく、ずっと長い間炎天下にさらされっ放し。それが山のように積み上がっている状態。

**4 主は私に言われた。「これらの骨に預言せよ。『干からびた骨よ、主のことばを聞け。**

そして、「この骨に『生き返れ』と言いなさい」と言われたので、エゼキエルが預言しました。すると、

**7-10 私は命じられたように預言した。私が預言していると、なんと、ガラガラと音がして、骨と骨とが互いにつながった。私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。そのとき、主は言われた。**

**「息に預言せよ。人の子よ、預言してその息に言え。『神である主はこう言われる。息よ、四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。』」**

私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中に入った。

そして彼らは生き返り、自分の足で立った。非常に大きな集団であった。

バラバラになっていた人骨の山が、それぞれガチガチとくっついて、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。そして人間の**大集団**になった。しかし、**その中に息はなかった。**

これは、何を言うとんねんと。次に解説があります。

11a 主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。

イスラエルはユダヤ人と同じ意味です。ユダヤ人はやがて国を取り上げられ、世界中に散り散りばらばらにされ、大変な酷い目に遭うのですが、散らされた時、彼らは3つの事を言います。

11b 彼らは言っている。『私たちの骨は干からび、望みは消え失せ、私たちは断ち切られた』と。

### ①私たちの骨は干からびた

人間の身体から出る物、生命体が生み出す物は、内臓も皮膚も爪も骨も全部有機物（\*骨は有機物と無機物の複合体）です。これを自然界にずっと放置しておく、最後は土の中のバクテリアに食われて同化、つまり有機物は放っておくと土の中に溶けて行く。置かれている周囲の環境に呑み込まれ、溶かされて、最後は消えてなくなる。

昔は日本も火葬ではなく土葬で、遺体は土に穴を掘って埋められ、そうしてバクテリアに食われて土に還る。死んでしまう事を土に還ると言いますね。

ところが、干からびているという事は、非常に長い間炎天下に置かれているけど、ユダヤ人という骨は土の中に同化する事なく、骨のまま残りっぱなしになっている。

これは、「ユダヤ人は国を失って2000年間、周りの民族と同化しない」という事です。

国を失い世界中に散らされ、現地の人たちとずっと一緒に住んでいると、普通は2代目・3代目…子々孫々いつの間にか混血が進んで、最終的に自分のルーツが何かを誰も知らない。

ユダヤ人は2000年間世界からほったらかしにされているにも拘らず、周りに溶け込む事がなかった。それは、同化したくなかったのではなく、したいと思っても周りがそれを承知してくれなかったから。それで、ユダヤ人は骨のまま、すなわち干からびたまま、自らの骨格というか、アイデンティティーを保ったまま苦しみ続ける。これがユダヤ人の悩みです。

### ②望みは消え失せ

望みとは一体何なのか？日本語で希望（のぞみ）の希は「まれ（稀）」とか「うすい（希薄・希釈）」と言うでしょ。希望とは「稀にしか叶わない望み」の事です。希望の意味を詳しく調べると、希望が無くなります。

エゼキエルが生きている時代のユダヤ人にとっての望みは何か？

「私たちは確かに迫害され、いじめられて苦勞があるけど、神がメシア（救済者）を送って、多くの問題から助け出して下さる。」「私たちが困っている時、神は必ず救い主を送って、私たちを解放して下さい。」

この救済者の事をヘブライ語で「マシアハメシア」と言います。

ウチの近所の一品料理屋、あれは“めしや”、名前が気に入ってるからよく行くんですけど。“ざめしや”。

救済者（メシア）が来るという、その望みについて約束している本が旧約聖書です。旧約聖書を信じているとは、旧約聖書に預言されているメシアがやって来る望みに、希望を託しているという事。ところがここで、望みは消え失せた。

それは、こういう事です。ユダヤ人は世界中に散らされ、余りにも長い間苦しみに遭う事によって、メシアを待望する信仰を失う。例外はいますが、多くのユダヤ人は、特にヒトラーのホロコーストを通して、神への信仰を捨てました。

600万人のユダヤ人がヒトラーに虐殺されていた時、「神は、なぜ助けてくれなかったのか?!」「我々は選民じゃないのか？それが絶滅一步手前まで行っているのに、神は救い主を送ってくれなかった。神がいるのにあの苦難があったという事は、神は我々の苦しみを何とも思っていないのか?!」

それだったら、神はいないと考えた方が楽になるんです。彼らは「**望みは消え失せた**。メシアは待っても来ない。メシアを待つのは無駄だ」という考えに傾いていきました。イスラエルの独立宣言に「神」という言葉は1つも出てきません。

アメリカの独立宣言は、信仰告白文の形態で書かれているんですよ。『我々は以下に述べる事を信じる。全ての人は生まれながらに平等であり、**創造主**が、命と自由と幸福の追求をするという権利を等しく与えて下さったという事を信じる。』アメリカ人に創造主の存在を教えたのはバイブルで、そのバイブルはユダヤ人が書いたんです。

それが、ユダヤ人が国を造って、イスラエルの独立宣言を書く時、「神」という言葉が一言も出て来ない。なぜなら、イスラエルを建国した中心的な人物たちは皆無神論者だから。ベングリオンはじめ、彼らは「神はいない」と信じていました。異邦人になろうと思ってもなれない。ではユダヤ教に徹するのかというと「いや、**望みは消え失せた**。」

### ③私たちは断ち切られた

断ち切られたは、ヘブライ語で「ガゾール」。日本語に翻訳すると「一刀両断」という意味です。昔ユダヤ人は大きな契約を結ぶ時、いけにえの胴体を一刀両断で向かい合わせにして、血の道を作りました。ここでの断ち切られるは、関係が断ち切られるというよりも、体が真っ二つに引き裂かれるという意味で、つまり「とどめを刺す」。

「私たちは『ユダヤ人のまま（骨は干からびた）で、信仰の**望みは消え失せ**、どこにも行き場がない状態で、最終的に一刀両断で滅びてしまう（断ち切られる!）』と叫ぶようになるであろう。」これは、ユダヤ人がローマによって散らされた後、1900年間叫び続けてきた事なんです。それを、ローマに滅ぼされる700年前に、エゼキエルが預言しているのです。それが、

**エゼキエル 37:11** 主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。見よ、彼らは言っている。『私たちの骨は干からび、**望みは消え失せ**、私たちは断ち切られた』と。

**エゼキエル 37:12** それゆえ、預言して彼らに言え。「神である主はこう言われる。わたしの民よ、見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。

11節の状態から、12節**イスラエルの地に連れて行く**と言うのですが、その前に墓から引き上げて。骨というのはユダヤ人でしたね。

では、墓とは何か？墓から引き上げて、**イスラエルの地に連れて行く**という事から、墓は、ユダヤ人がイスラエルに行く前に住んでいた場所だと分かります。それは全世界。「ユダヤ人よ、全世界は墓場だ。そのようになるのだ。」全世界どこに住んでも、ユダヤ人にとって墓場のような状態になるという事です。

私は2月にポーランドとイスラエルに行って来ました。ポーランドではアウシュビッツ収容所も見学しましたが、その前にシンドラーの工場跡を見学したんです。スピルバーグの映画で有名になりましたが、シンドラーは実在の人物でナチス党员でした。

その立場を逆利用して、ユダヤ人が強制収容所に放り込まれるのを阻止するために、自分の工場に雇い、ありとあらゆる手段を駆使しながら、ユダヤ人を絶滅から救おうと頑張った人です。

その工場跡が博物館になっていて、ヒトラーがどうやって台頭して行ったのか説明がありました。第一次世界大戦が終わった時、日本も戦勝国の1つですが、戦勝国は「この戦争の原因はドイツだ。ドイツが悪いのだから、二度と戦争できない国にすべきだ。」それで、ひどいお仕置きを義務付ける条約を結びました。ベルサイユ条約。

それに基づいて、ドイツは武器製造禁止、軍隊は限りなく縮小、重要産業工業地帯は取り上げられ、とても支払い切れないような超巨額な賠償金が課せられて、非常に豊かな国だったのが、戦争が終わるや否や、あっという間にヨーロッパ最貧国。

ドイツ国民は基本的に勤勉です。彼らは皆貯金してます。しかし、ドイツ政府は借金を払わなければならず、お金が足りないので、お札を刷りまくってハイパーインフレ。3600%のインフレ。例えばコンビニでガリガリ君を買う時、手に取ってレジに向かっていく間に、値段が3倍になっている。走らなあかん。という事は、中流階級の人たちが真面目に銀行に預けてきた貯金は紙屑になったんです。

第一次世界大戦で、ドイツの国土は戦場になってません。ドイツ軍は外に出て戦ったので、日本のように広島・長崎の原爆投下や東京大空襲・大阪大空襲などが無いから、国内にいたら「戦争やった」という感じがしない。何が何だか分からないけど、ある日突然ドイツ負けたと。そして、どんどん転落させられた。

その時、一般のドイツ人が考えたのは「もうフニャフニャしたリーダーは要らん。世界の要求にヘーヘーコラコラせず、言うべき事をガンと言う、強力なリーダーシップを持ったカリスマ的人物に引っ張ってもらいたい。その指導者で、失われたドイツ人の誇りを取り戻してほしい。」そんな要請の空気が充満しているところに登場したのがアドルフ・ヒトラー（1889-1945）。

ヒトラーは1925年頃テロに失敗して刑務所に入れられ、その中で『我が闘争』という本を書きます。ものすごいデタラメ。「ドイツが第一次世界大戦で負けたのは、ドイツが弱かったからではなく、ドイツが悪かったのでもない。ドイツはヨーロッパのどこよりも優秀で腰抜けじゃない。なのに負けたのは、ドイツ人のフリをして、我々をおとしめようとしている裏切り者の勢力が国内にあるから。それはユダヤ人だ。ユダヤ人は世界制覇を目論んでいて、それが成功したら全人類は滅びる。世界制覇のためには、一番優秀な民族を片付けなければならないからドイツを狙ったのだ。彼らは我々の体の中にいる寄生虫のようなもの。それを叩く事がドイツ復活だ。」

狂ってます。狂ってるけど、日本でもこれと似ている事を、まだ言ってる人がいるから気をつけて下さい。あまり汚い言葉を言うと、またピー入れなあかんけど、「恥を知れ」と言いたい。反ユダヤ主義はヘイトスピーチだと思いますよ。

とにかく、そういう形でヒトラーが登場し、あっという間にドイツだけでなく、ヨーロッパ中に拡大していきます。その時、多くのユダヤ人難民を乗せた難民船事件というのが3つありました。それを少し紹介したいと思います。

①セントルイス号事件(1939年); ドイツから逃れたユダヤ人難民が乗っている船セントルイス号。937人。

ヨーロッパにはどこも住める所がない。どこに行ったかというキューバ。そこに入国するために高い金払って、正式にキューバが発行しているビザを購入し、港に着いて上陸しようとした時、キューバ大統領が「上陸するな。」「我々は、ちゃんとビザを持っています。」「そのビザを無効にする権限を独立国家は持っている。ユダヤ人は厄介者で要らん。ナチスが支配しているヨーロッパに帰れ」で追い返された。

乗客たちの悲鳴の中、セントルイス号の船長シュレーデルはドイツ人ですが、「それはない。あんまりだ!」キューバはアメリカの目と鼻の先。アメリカは移民で強くなった国だから、移民の気持ちが分かるだろう。「何とか入れてやってくれ」と、定住地となるためにアメリカ当局と交渉しました。ですが、アメリカは第二次世界大戦の間、ユダヤ人難民を一切受け入れてません。「我々は今戦争中で、難民を受けいたら福利厚生予算がない。よそを当たってくれ。」

それで、アメリカより人の良い国カナダに行ったら、「ユダヤ人、そんなにたくさん来てもらったら困る。」アメリカとカナダという移民大国が「ユダヤ人要らん」と断ったので、他の移民大国も全部ダメです。仕方がないので、シュレーデルはそのままヨーロッパに帰り、イギリス・フランス・オランダ・ベルギーに約200人ずつ引き受けてもらうのですが、残った人たちは、どうしても引き受け手がいない。それで最終的に、ナチスが支配する国に再び戻った。最後どうなりましたか?

この船に乗っていた937人の1/4の人たちが、虐殺収容所に連れて行かれて殺された。これが1939年。

②SSアトランティック号/パトリア号事件(1940年);ドイツにいたら危ないのでルーマニアに逃げたユダヤ人が、そこで船の契約をしてSSアトランティック号に乗りました。1730人。

アメリカ・カナダ・中南米は無理と分かった。それならあそこしかない。パレスチナ。当時のパレスチナは、イギリスが委任統治領という事で管理していました。イギリスはユダヤ人に「ここにユダヤ人の国を造る」という約束をしています。それが「バルフォア宣言」。

バルフォア宣言を実行するために、国際連盟がイギリスにここの統治を任せていたのです。

SSアトランティック号はパレスチナの港に入ります。しかしそこに、イギリス当局の軍隊がズラッと並んでいて「上陸するな。おまえらは不法入国しようとしたのでパレスチナに入れない。すぐにこの船に乗り換えろ。」

次の船はパトリア号。そしてインド洋のモーリシャス島・海の監獄/海の刑務所に送ろうとします。

ようやく約束の地に着いたと思ったら追い出される。パレスチナにいたユダヤ人の戦闘部隊が見るに見かねて、パトリア号のエンジン部分に少量の爆薬を仕掛け、エンジンを動かないようにして、モーリシャス島に行けないように工作しました。ところが、爆薬の量を間違えて沈没。殆どが溺死。

生き残った人たちはパレスチナの留置場につながれて、捕虜収容所に放り込まれました。

ユダヤ人はパレスチナにも行き場がない。

③ストルマ号(1941年);同じように、ドイツから逃げ出したユダヤ人が、ルーマニアまで行ってストルマ号に乗ります。769人。パレスチナに上陸できないと分かっているにもかかわらず、ここしか行く所がない。

それで、闇夜に紛れて何とか上陸できるのではという一縷の可能性にかけ、数日でパレスチナに着く予定だったのが、途中でエンジントラブル。エンジンが完全に動かなくなった。仕方なくトルコ/イスタンブールに停泊して「一時的に上陸させてくれ。」トルコは一切ノー。

それで769人が、2カ月以上缶詰め状態。ストルマ号には流し台が4つしかない。飲料水用蛇口は1つだけ。トイレは8か所。トイレトペーパーなし。救命胴衣なし。

2 カ月以上経った時、トルコは「いつまでも港にいるな。」でも、エンジンが動かない。トルコ海軍はストルマ号を引っ張って、黒海の真ん中に持って行き、そこで綱を切って置き去りにした。エンジンがないから、ただ漂っているだけです。

1941 年、黒海の海底には、ソ連の潜水艦がたくさん潜水していました。彼らは、黒海で味方以外の船を見つけたら、戦略物資がドイツに渡るのを阻止するために「中立国であっても、魚雷を発射して撃沈しろ」という秘密命令を受けていたんです。そのため、ソ連の潜水艦は魚雷を発射し、ストルマ号は1発で撃沈されました。769 人中、生存者は1 人だけ。

この人の証言によって、何があったのかが後世に明らかになったのです。

言いたい事は、ヒトラーが出て来てヨーロッパで権力を拡大していった時、彼だけがユダヤ人を憎んでいたかというところじゃない。アメリカもカナダもイギリスも、また中米もパレスチナでもトルコでも、世界中どこでも、ユダヤ人は歓迎されない。ユダヤ人を手厚く迎えてくれる所は世界にない。すなわち、世界は墓場。ユダヤ人にとって世界は墓場以外の何ものでもない、という時代が来る事を語っているのですが、まさしく第二次世界大戦で起こりました。

**エゼキエル 37:12** それゆえ、預言して彼らに言え。

「神である主はこう言われる。わたしの民よ、見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓（それぞれ散っている世界）から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。」

私が今日、特に見たいのがここなんです。イスラエル。

連れて行くというのは、ユダヤ人が行くというよりも、この主語はわたし。わたしとは主・バイブルの神・世界をお造りになった創造主。創造主がユダヤ人をイスラエルの地に連れて行く。

すなわち、ユダヤ人のイスラエル再建に関して、神がかつた事件が続出するという事をほのめかしている。イスラエル建国の中に、人がやったというよりも、神が連れて行ったとしか言えないような事を見て取る事ができるんだと。

ユダヤ人は「私たちの骨は干からび、望みは消え失せ、私たちは断ち切られた」と叫んでいたけど、そのヨーロッパ・ナチスから全く危害を加えられない安全圏に住んでいるユダヤ人がいました。

ユダヤ人は、建国前のパレスチナにもう住んでいたんです。ナチスの迫害が本格化する 60 年も 70 年も前に、「ヨーロッパに期待してもダメだ。ユダヤ人はユダヤ人の国に帰らない限り、本当の安全なんかない。」先見の明というか、国造りの基礎を造るために、まだトルコの支配下にあったパレスチナに、先に入って開墾していました。

19 世紀後半にテオドール・ヘルツェル (1860-1904) が登場します。ユダヤ人ジャーナリスト。

大体、当たり前な事はニュースにならない。犬が私を噛んでもニュースにならないけど、私が犬を噛んだら「あのユーチューバー、犬噛むぞ!」みたいな、「えーっ!」というのがニュースになる。

ヘルツェルは特派員として色々な所に取材に行きますが、「えーっ!」というニュースには大抵ユダヤ人が絡んでいる。というより、ユダヤ人が被害者として、吊し上げをくらっている。

「なぜユダヤ人は、こんなに迫害され差別されるのか? このユダヤ人問題を解決する方法は 1 つしかない。それは、ユダヤ人がユダヤ人の国を持つ事だ。それは、ユダヤ人にも異邦人にも歓迎される事だ」と考えて『ユダヤ人国家』(1896) という本を書きました。

ユダヤ人に歓迎されるとはどういう事か？ なぜ肩身の狭い思いをし、差別に甘んじながら懸命に生きているかという「よそもん」だからです。よそから来た民族は、その国になくってはならない人材でないと、いつまでも軽んじられる。だから、行った場所で頑張るけど、頑張りすぎて活躍し過ぎ・成功し過ぎるとねたまれる。失敗したら軽んじられ、成功したら恨まれて。

なぜ、こんなにしんどい思いをするのか？ よそもんだから。だから、ユダヤ人がよそもんではない国・ユダヤ人のための国を造ったら、もうそんなしんどい思いをする事はなくなる！ユダヤ人は歓迎するだろう。

異邦人はどうか？ 異邦人はユダヤ人に出て行ってほしい。色んな事件取材していると、そうとしか思えない。しかし、受け皿がない限り出て行かない。だから、ユダヤ人国家という受け皿が出来たら、異邦人は厄介払いが出来るので喜ぶだろう。

つまり、ユダヤ人国家が出来るという事は、ユダヤ人にも異邦人にも歓迎される良い事だ。

『ユダヤ人国家』が書かれた時、世界中のユダヤ人リーダーたちが熱狂し、1897年に第1回シオニスト会議を開きます。シオニストとは「シオン(エルサレムの別名)に戻り、先祖たちがいた所に国を造ろう！」と言う人たち。この会議で、ユダヤ人国家を造る事を大々的に宣言しました。

ヘルツェルは、宣言したその日の日記に「50年後にはユダヤ人国家が出来る」と書いています。

それから20年後の1917年、すごい事が起きます。当時は第一次世界大戦で、イギリス・フランス・イタリアなどの連合軍と、ドイツ帝国・オーストリア帝国・オスマン帝国などの帝国/中央同盟軍の戦い。

その中で、イギリスには悩みがありました。それは島国である事。すなわち物流が全部海。

第一次世界大戦は新兵器が次々にデビューした戦争です。特に、ドイツの新兵器の潜水艦Uボートは、敵からは姿が見えないので、イギリスから運ばれて来るあらゆる戦略物資を積み込んだ貨物船が次々に撃沈されました。

戦争に必要なのは武器弾薬です。当時、無煙火薬が発明され使用されたのですが、これを作るには有機溶剤のアセトンが要ります。アセトンを製造するためには海外からの輸入に頼らないと駄目で、しかも非常に長い時間をかけないと作れない。戦う戦略は知っているけど、武器弾薬・砲弾がなければ戦いに負ける。何とか火薬不足を解消しなければならない。しかし解決法が見つからない。

その時、1人の天才的なユダヤ人科学者ヴァイツマン(1874-1952)が現れます。彼はトウモロコシのデンプンにバクテリアをブレンドすると、バクテリアが持つ働きによって、アセトンを短期間に大量生産できるという技術を開発し、世界の誰も知らないこの技術をイギリスに提供しました。

イギリスはこれにより武器弾薬・砲弾の大量生産に成功し、これが1つの大きな要因となって勝ちます。

勝利を得た時、時の首相ロイド・ジョージ(1863-1945)がヴァイツマンに、「お礼がしたいので、何でも言ってくれ。」皆さん、どう言いますか？ ハワイ旅行とか、そんなんあきませんよ。

ヴァイツマンは「わが民族の国、我々の父祖の国を造って下さい。」ロイド・ジョージは「分かった。」

外務大臣バルフォアに「イギリスは、パレスチナにユダヤ人国家を造る事を承認するだけではなく、味方になって手伝う」という事を書かせました。バルフォア宣言。

シオニスト会議直後、既にたくさんのユダヤ人がパレスチナに行っていますが、イギリスがパレスチナにユダヤ人国家を造る事を承認し手伝うという事が、どんなにすごい事か。

この時点で、ユダヤ人国家が消滅して 1800 年経っているんですよ。1800 年前に消滅している国をもう一度再建するにあたって、当時世界最強の国イギリスが「それを承認する」だけでなく、「味方になって実現に協力する」と約束してくれた。

彼がそう言った時、パレスチナはまだトルコのものなんです。

自分の支配下のないものをそこに造ってやると、よう言うたもんやと思うんですけど。

このバルフォア宣言を出して 6 週間後、パレスチナはイギリス軍の手に落ちるんです。

パレスチナに攻め込んだイギリス人将校アレンビー (1861-1936) は、エルサレムのヤッファ門から入るのですが、「ここは聖なる地である」と馬から降りて、徒歩でエルサレムの中に入って行きました。

2 回目以降は馬に乗ってるんですけど…。でも、そういう事がありました。

第一次世界大戦が終わった後、戦勝国が 4 つ、国際連盟の常任理事国になりました。

イギリス・フランス・イタリア…日本ですよ。日本は国際連盟の常任理事国だった時代があるんです。

国際連盟を造るのはアメリカが言い出しっぺなので、本当はアメリカが入る予定だったのが、ウィルソン大統領は国内の反対で入れませんでした。

この 4 カ国が集まったサンレモ会議でイギリスが提案します。

「パレスチナにユダヤ人国家を造るというバルフォア宣言について、皆さんの賛同をもらいたい。」

4 カ国全部がバルフォア宣言を承認し、それを実行するために、イギリスにパレスチナ委任統治権を与える事を決定しました。イスラエルの国家建設の正当性はここにあるんです。ここにある。

国際連合の前の国際連盟で、常任理事国が「国際連盟の正式な議決とする」と決定した。

これが、イスラエル建国の国際法的根拠です。

中東問題の研究者はここが抜けているんですよ。細かい事を言っても余り関心がないかもしれませんが、これはすごく大事なんです、実は。つまり、イギリス一国の方針ではなく、当時の国際社会の覇権国家全部の同意を得て、国際連盟の総意となったという事。

国際連合は国際連盟を引き継ぐので、これが法的根拠となって、イスラエル再建の正当性が証明されるのです。

さて、今までざっと散文的にお話しましたが、これは、実は神がかっている事なんです。

イギリスがイスラエル再建について、国際連盟を動かしてまでやってくれたのはなぜか？

アセトンの大量生産を教えてくれたから。だけど、ちょっとやり過ぎと思いませんか？

確かにアセトンがなかったら勝てなかったかも分からないけど、それにしても、ものすごい大盤振る舞いと思いませんか？

ロイド・ジョージ首相には、若い時に大きな影響を受けたおじさんがいて、彼に触発されて政治家になりました。そのおじさんはイギリスのバプテスト教会の牧師で、ライフワークは聖書預言の研究でした。おじさんは「人類歴史が終末期に差しかかると、ユダヤ人は元いた所に国を造ると聖書に書いてある。」

彼の薫陶を受けたロイド・ジョージは、政治家になった時、ディサイプル教会 (Disciples of Christ) のメンバーになります。ディサイプル教会は「聖書からは何も引かない。何も足さない。聖書に書いてある事は全部実現する」と教えている教会です。

ロイド・ジョージ内閣は戦時内閣で閣僚は 9 人。その内 7 人がクリスチャンで、その 1 人がバルフォア。

7人中6人がカルバン派。1900年代初期のカルバン派は「終末期、ユダヤ人は元いた所に国を造る」という事をまともに信じていました。つまり9人中7人、或いは6人が聖書を額面通り信じている内閣。

彼が、なぜイスラエル再建をそこまでやったのか？確かにアセトンのお礼もあるけど、「イギリスが世界の覇権を握っているこの時代、聖書預言実現のために我々を使って頂けるかもしれない。それに関与できるのは素晴らしい。それは大英帝国に祝福が及ぶ事だ」と判断して、この選択をしたんです。

私は聖書預言についてお話しし続けているし、私も集会の仲間たちも、聖書預言はそのまま100%実現すると信じています。だからと言って、世界に影響を与える事はないんですよ。

「私は聖書預言を信じている。」「だから?」「それで?」みたいな。

私が言いたいのは、イギリスが世界の覇権を握っていた時の、政治のトップリーダーたちの歴史観は、聖書預言に由来するものであったという事。世界に大きな影響力・感化力を持っている人たちの歴史観が何に基づいて構築されているかという、「聖書預言は必ず実現する」という歴史観に由来するのです。世界の事は、英会話が分かるだけではダメです。

今の世界のトップリーダーは、どんな世界観で世界を見ているのか。政治をしているのか。

イギリスはバルフォア宣言を出す前に、アメリカの支持がないと意味がないと思って、ウィルソン大統領に「サンレモ会議にバルフォア宣言を出そうと思いますが、どうでしょうか?」と相談しています。

実は、ウィルソン大統領のお父さんは、聖書の神学者・聖書を研究する学者です。専門は聖書預言。

その息子がウィルソン大統領。アメリカの歴代大統領の中で、最もユダヤ人に親しかった人。

もしかしたら、トランプを超えるかもしれません。そんな人たちです。

だから、聖書を知るという事は世界を知る事に繋がるのです。

もう1つ、神がかっている事。イギリスはバルフォア宣言を果たしたかという、結局果たしませんでした。第二次世界大戦が終わる頃には、すっかり反ユダヤの国になっていました。

というのは、ここにユダヤ人国家を造るとなると、パレスチナやエジプトのユダヤ人たちが反乱を起こす気配があったんです。

エジプトで反乱を起こされるとイギリスは困るんですね。エジプトにはスエズ運河があり、それこそがイギリスが7つの海を支配するショートカットだから。現地の人たちが反イギリスになってしまったら経営が難しくなる。それで手の平を返して、ユダヤ人との約束を反故にして、「もうパレスチナ問題に関わるのは嫌気がさした。国連に丸投げ!」で、国連に丸投げ。

任された国連が、最終的に1947年11月29日にパレスチナ分割決議案を討議しました。

パレスチナ分割決議案とは、パレスチナの土地の中で、ユダヤ人が多い所にユダヤ人の国を、パレスチナ人(アラブ人)が多い所にはパレスチナ人の国を造る。2つの国に分けてしまう。

「あんたら、ホンマに仲が悪いから、もう別々の国になった方がいい。2つの国に分けましょう!」

ユダヤ人はそれを呑みますが、アラブ人は拒否しました。

一民族の集団であって国ではないものが、国に格上げになるのを決めるのは、ヤル気ではありません。

もちろん、ヤル気も必要ですよ。でもそれ以上に、ある民族集団が国民・国家になれるのは、その時代の覇権国家の同意があるかどうかです。

その時代に最も力を持っている国が「ここを独立国家にしよう」と言えば話はまとまる。  
しかし却下されたら、どんなに独立したいと言っても国にはなれない。

第二次世界大戦終了後、イギリスは凋落して、アメリカとソ連の米ソ冷戦時代が既に始まっていました。  
この両国からユダヤ人国家承認を取り付けない限り、イスラエルは出来ません。  
米ソがそれぞれ賛成したら、自分たちの力を使って、「賛成しろ」と他の国々に圧力を加えてくれます。  
でも両方共承認しないなら、その力を使ってイスラエル建国を邪魔します。  
米ソがどうなのか、という事がすごく大事なのです。

不思議な事にソ連がですよ、皆さん。イスラエル国家をいち早く認めるんです。なぜかという、先程言ったように、ベングリオンはじめイスラエルのトップリーダーたちは労働党。つまり社会主義政党。  
なので、イスラエルに親切にしていたら、もしかしたら社会主義国・東側陣営の一員になるかも。  
イスラエルの位置は戦略的に 3 大陸のど真ん中。そこに、ソ連の息のかかった国ができるのは非常に好ましいという事で、下心見え見えでイスラエル承認。これが後で効いてくるんです。

問題はアメリカ。今でこそアメリカはイスラエルの応援団ですが、戦争中はユダヤ人に対して本当に冷たかった。第二次世界大戦時の大統領はルーズベルト（1982-1945）。  
アメリカ大統領は 2 回までしか続けられません。1 期 4 年・2 期 8 年が限界。彼は 4 期やりました。  
非常に指導力があって、戦争中の厳しい時は、強力なリーダーシップの持ち主が必要だから。

ルーズベルトはイスラエル建国に大反対でした。亡くなる 1 週間前に、サウジアラビアの王様に手紙を書いています。「アラブの王様の皆様が懸念されているイスラエルの再建については、皆様のご意向を無視してアメリカが動く事はありません。」アラブ世界の意向を最大限尊重して決める。  
結論を言うと、アメリカはイスラエル建国を認めないと約束しているのです。  
そして 1 週間後、ランチの後に脳溢血で倒れて血圧 320。まるで、何かに打たれたみたい。

アメリカ大統領が亡くなると、副大統領がそのまま大統領に格上げになります。  
副大統領はトルーマン（1984-1972）。彼はルーズベルトから重要な事を一切聞かされていませんでした。  
お飾り。ルーズベルトは重要な事を全部、自分の部下とだけ話し合っただけで粛々と決めて行く。  
だから、トルーマンが大統領になった時「えっ、そんな事あったん?!」  
一番びっくりしたのが、原爆を秘密で開発しているという事です。  
副大統領が原爆開発を知らされていなかったんですよ。「おまえ、関係ないわ」みたいに。

ルーズベルトが集めた長官たちは彼の考えに従うので、全員イスラエル建国に反対。  
中でも反対したのは国務長官ジョージ・マーシャル（1880-1959）で、3 つ理由があります。  
①イスラエル建国を認めたら、それを許さないアラブ諸国が襲いかかって、ユダヤ人はこの地でホロコーストを経験する事になる。  
②ユダヤ人に肩入れしたら、産油国が腹を立ててソ連に近寄る。これはアメリカの国益に合わない。  
③ここで血みどろな事が起これば、アメリカはしたくない介入戦争に巻き込まれる可能性がある。  
どれを見てもアメリカにプラスにならない。だから、イスラエルなんか認めたら絶対ダメ。

ところが、トルーマンはイスラエル建国を認めます。なぜか？彼も聖書研究者だったんです。  
11 月 29 日投票の数日前に、「私は賛成票を投じるが、何とかマーシャルを説得したい。」  
それで、マーシャルと自分の部下クリフォードを執務室に呼び、先にマーシャルに話させました。

「イスラエルを認めたら、アメリカにとって良い事は何もありません!」と、ずっと1時間以上。「クリフォード君の意見も聞きたい。」それは、トルーマン自身の意見。黒子。二人羽おりみたい。「こう言えよ」って言い含めてある。で、クリフォードが「イスラエルを認めるべきだと思います。」バーッと。

マーシャルの顔がみるみる真っ赤になって「なんで、クリフォードが執務室にいるのだ?!」トルーマンが「私が呼んだんだ。」面と向かって言うと喧嘩になるから、クリフォードを呼んだけど一緒。最終的にトルーマンが「賛成票を投じる」と言った時、マーシャルは「これだけは言うておきます。次の大統領選挙、私はあなたに投票しません。」

こんなに部下になめられた大統領、いません。なぜなめられているかということ、選挙の洗礼を受けていないから。大統領選挙を経ずに、格上げで大統領になった。「おまえなんか!」というのがあったんでしょう。だけど、トルーマンが突っ切った。

それで賛成 33 票・反対 13 票・棄権 10 票。有効投票の 2/3 が賛成という事で、イスラエルが出来ました。もし、ルーズベルトの血圧がもう少し低かったら大統領のまま。イスラエル建国はなかったんです。

1948 年 5 月 14 日、イギリスはパレスチナから出て行きました。「くそっ、敗北だ!」イギリス司令官が最後にやった事は立ち小便だそうです。「イギリスを屈辱させて…。こんな土地…!」

5 月 14 日、イギリスが帰るのを周りのアラブの 5 つの国、エジプト・ヨルダン・レバノン・シリア・イラクが虎視眈々と待ち構えていました。それにスーダン・イエメン・サウジアラビアが援軍として入って来て、15 万対 3 万の戦争になります。アラブ軍は全部正規軍で、イスラエルは自警団。

5 月 15 日、いきなり周りから軍隊が入って来て、自警団が正規軍と戦う。最初の 1 カ月でイスラエルはボロボロ。武器がない。ないんです。どこも売ってくれなかった。かろうじて持ちこたえるので精一杯。

1 カ月経った時に休戦協定が入りました。休戦している時にチェコスロバキアが売ってくれて、大量の武器がイスラエルに届きます。チェコは 1948 年に既に共産化していて、バックがソ連。しかも第二次世界大戦時、チェコにはドイツの兵器工場があったので、大量生産の武器があり余っていて、在庫一掃セールでドツと来た。来たけど、その機関銃を見たら鉤十字が付いている。ナチス時代に作った機関銃や迫撃砲が届くわけ。ユダヤ人を追い回した武器を、ユダヤ人が使って戦う。

しかし、最初の 1 カ月で押し込まれたのには、もう 1 つ理由がありました。イスラエルには軍用機が 1 機もなかったんです。近代戦では制空権を握った方が勝ちです。特に、中東はジャングルがなく砂漠なので遮蔽物がない。上から覗き見られたら、手も足も出ません。エジプトも周りの国々も空軍があるけど、イスラエルには軍用機がない。その時、チェコが売ってくれたんですよ。それはメッサーシュミットとって、また鉤十字付き。だけど問題がありました。軍用機は手に入ったけど、パイロットがいない。劣勢をどうしたものか。

ところが、イスラエルが劣勢なのを見て、世界中から 3500 人の志願兵が集まるんです。その中の 190 人がパイロット。彼らがメッサーシュミットに乗って、イスラエルに攻め込むアラブ軍と戦うのですが、みんな異邦人。ユダヤ人ではないんですよ。彼らはやるだけやって形勢を逆転させたら、とっとと帰って、今どこにいるか分からない。不思議としか言いようがないような勝ち方です。

さて、トルーマン大統領は、イスラエルに賛成票を入れると決めた時、日記にこう書きました。

「私は第2のキュロス王になりたい。」キュロス王はエズラ記1章に出て来て、「バビロンに滅ぼされたユダヤ人のエルサレムを再建するために、自分たちの先祖の所に帰りなさい」と勧めた王様。

トルーマンは「こんな人になりたい」と日記に書いた。つまり、彼は聖書をよく知っていたのですね。

**エゼキエル 37:13** わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知る。

「我々は絶滅させられても不思議ではない民族だったのに、中東のど真ん中に国が出来た」という奇跡をユダヤ人が見た時、それを前もって預言し、実現した神を知る。

それを見た私たちもまた、そうではないかなと思います。聖書の神は目に見えない方ですが、聖書の預言が目に見える世界の中で実現する事を通して、生きて・働いて・存在して、私たちを守る方である事が分かるんです。

最後に1つお話して終わりたいと思います。

2週間くらい前に、群馬の教会で今日のようなお話をしました。終わってから若いご夫婦が来られたのですが、奥さんとは、まだ中学生の頃に話した事があって「大きくなったね」と。ご主人はものすごい筋肉マンで、真っ黒に焼けてムキムキ。話し方や返事がとても気持ちがいい。「ハイ！ハイ！サバサバしてます！」みたいな感じ。「この人、気持ちいいなあ」と思って、お仕事聞いたら自衛官。「今日の聖書の話は、非常に感銘深いものでありましたっ！」みたいな。

「感銘深かったですか。では、生まれて初めてではなくて、ミッション系の学校とかに通ってたんですか？」  
「いいえ。私の人生に、キリストも神も聖書も殆ど関係ありませんでした。でも今回聞いて、すごく心に残ったんですが、それには前段があります。」

彼は即応部隊です。何か大きな事件があった時、すぐに入って行く部隊。自衛隊は海外に基地を持っていて、初の海外基地拠点がジブチ。ジブチ国際空港の敷地の中にあります。彼は半年前までそこにいました。ここには自衛隊だけではなく、米軍・フランス軍・イギリス軍・ドイツ軍、ヨーロッパの軍隊みな集まっています。

ジブチと向かいのイエメンの間のバブ・エル・マンデブ海峡。そこは非常に戦略的な所で、一時海賊がたくさん出ました。その取り締まりのために自衛隊がいたのですが、海賊が最近パタッと出て来てない。それなのになぜいるのかというと、海賊よりもっと厄介なのが出て来たんです。

中国。習近平。一帯一路構想で、遂にアフリカまで手を伸ばし、ここにトンデモナイ基地を造っている。

それを牽制するために西側諸国が軍を出して、ここに基地を造っている。だから軍隊同士、仲がいい。ある時、フランス軍が輪になって、美しいハーモニーで歌っていました。軍歌には聞こえない。引き寄せられるように行ったら、皆小さな本を持って。「これ讚美歌じゃないか？」

彼らが持っていたのはバイブルでした。じっと見ていたら、「自衛隊の皆さん、良かったら輪に入りませんか？」それで、分からないけど一緒に歌いました。

「フランス人にはフランスの神さんがいて、こんな所で守ってもらってよろしいですな。」すると、「バイブルの神に、フランス人の神さんとか、日本人の神さんとかないんですよ。太陽は1つしかないでしょ。日本の太陽とか、アメリカの太陽とかって言わない。1つだけだから。全てのものの造り主・歴史の支配者は、唯一の神・創造主だけですよ。」

それがすごく心に残って、帰国して「教会に連れて行ってくれ。」それで来て、「日本語っていいですね。今日は、よく分かりました」と言うてくれはりました。

聖書預言が語られた1つの目的は、終末に対して準備させるためです。

それはまず、目には見えないけど、この世界の支配者がおられるという事を、預言の実現という形で知る事ができるんじゃないでしょうか？

是非聖書を通して、創造主なる神を信じて下さい。心からお勧めして終えたいと思います。



\* 動画は YouTube で「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」検索。ぜひ見て下さい。

\* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(約14分) も是非どうぞ。YouTube もあります。

動画筆記 : Rumi